基調講演

ドイツ語圏のピアノ教育におけるテクノロジーの活用

ロルフ・プラッゲ（ピアニスト、ザルツブルグ・モーツァルテウム大学教授）
通訳　中地 雅之

中地：プラッゲ先生は、ザルツブルク・モーツァルテウムでは私のピアノの先生でもある。前回の本学会の研究コンサートでは、リストのピアノ協奏曲を２回も演奏して頂いた。今回の研究コンサートでは、ピアノ３台のためのコンチェルトをお聴きいただける。この基調講演は､私からの質問にお答え頂く形で進行する。

まず、ドイツ語圏の鍵盤楽器事情は電子楽器も含めてどうか。ピアノでもヴェーゼンドルファーの経営が厳しくなってヤマハが入っている等聞いている。

プラッゲ氏：ヨーロッパのドイツ語圏では、ピアノ製造に関してはヤマハ、カワイがどんどん入っている。電子キーボードも日本の楽器がたくさん入っていて、サイレント機能付きのピアノは増えている。

特にポピュラー音楽には電子楽器は欠かせない。ヤマハやローランドの楽器がドイツ語圏でも多く使われ、それらを受けて大学でも電子楽器を使っており、電子キーボードの科目も設置されている。私も学生の時受講した。アンサンブルや実験的なオーケストラを編成する大学もある。長い歴史のあるヨーロッパではそれらの試みは新しいと考えられている。

中地：フラーゲ先生には、2011 年に初めて電子キーボードアンサンブルとの共演をして頂いた。ピアノコンチェルトを、最初は私と先生の２台ピアノ、次に先生と電子キーボードオーケストラとで共演してもらった。

先生：私にとってもその体験はポジティブなものだった。ピアニストとして初めての経験だった。電子楽器は高度な芸術性を表現できるまでに発達したと感じた。この学会の研究演奏で学ぶことができた。

その時は２台ピアノ版とハイブリッドと２つのパターンでやったが新しい可能性として、リストが書かなかった楽器で新しい演奏ができると感じていた。今回も古典派の作品で同じことを感じている。

教育的視点からも電子キーボードは可能性がある。オーストリアの学生にも良い状態のピアノが手に入らない学生はいて、電子ピアノを使う事がある。また、卒業後のいろいろな活動でも電子キーボードの活用を社会から要求されていて、大学教育の必要性がある。

中地：昨年コンピューターを活用したピアノの自動伴奏の研究が本学会で紹介された。モーツァルテウムでもそういったテクノロジーを活用したピアノのレッスンが行われているので、その様子をお話い頂きたい。

先生：ピアノ教育とテクノロジーということでは、モーツァルテウムでは日本の神戸女学院、中国の北京音楽院の２箇所とドイツで遠隔レッスンを行っている。神戸女学院にはモーツァルテウムを卒業した先生がおり、アドヴァイザートして参加している。インターネットのシステムで、神戸女学院の学生が演奏する画像と音声をモーツァルテウムに送り、モーツァルテウムの教員がアドヴァイスをしている。このプロジェクトはここ数年進めているものである。

北京音楽院にはヴェーゼンドルファーの自動演奏システムを持ったピアノがあり、モーツァルテウムのヴェーゼンドルファーとインターネットでつながっている。北京のピアノを弾くと、鍵盤やペダルの動きがモーツァルテウムのピアノ上で再現され、モーツァルテウムの先生のアドヴァイスを受けることができる。また、フランスの先生が中心になって３カ国に置かれた自動演奏システムを持つヴェーゼンドルファーのピアノをインターネットでつなぎ、「ゴルトベルク」をリレーで演奏するというプロジェクトもあった。

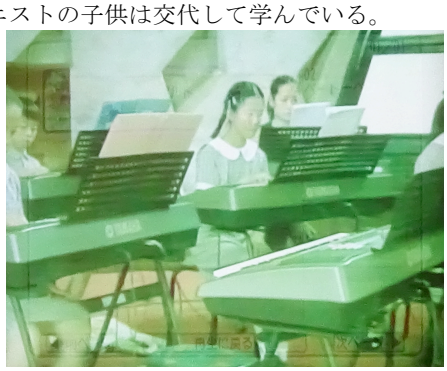
モーツァルテウムで行われているいくつかの試みにもしご興味を持たれたら、資料もある。この学会でもこのような試みが広がっていく事を望んでいる。

中地：ここで、阿方先生がお持ちの様々なタイプのキーボードアンサンブルの録画資料もご紹介したい。

阿方：イレギュラーな基調講演となるが、プラッゲ先生に電子キーボードに関する情報を求められてお見せしたところ、本日の基調講演の付録のような形でご紹介したいということになった。

１）台湾東海大学付属小学校

モーツァルト　ピアノ協奏曲第 12 番第一楽章。指揮は 2011 年全国大会基調講演講師のクー先生。オケパートは電子キーボードのみのアンサンブル。楽章ごとにピアニストの子供は交代して学んでいる。



２）チェコの音楽教師のサマーセミナー
　電子キーボードのハイブリッド・オーケストラ
チェコは弦楽器の盛んな国で、小学校の先生も弦を弾ける人がたくさんいる。エレキギターやアコーディオンも加わる編成で、ベートーヴェンのピアノ協奏曲。体育館での演奏。ピアノも電子キーボード。ピアニストは東京学芸大学や本学会にもご縁のあるマストナップ先生。全員小学校の先生のアンサンブルで弦のピッチがあいにくいが、電子キーボードが入ることでピッチがまとまりの良い響きになっている。ピアノは 14 年前のクラビノーバ。アコースティック楽器と電子楽器の違いなど問題にさせない素晴らしい演奏である。

　今日は韓国のハン先生もいらしている。ソウル教育大学で､デジタルピアノオーケストラで 12 年間にわたって毎年コンサートをなさっている。なぜそういう取り組みをなさっているのか直接お話頂きたい。
ハン氏：小学校教諭を目指す学生たちを教えており、彼らが学校で音楽教育の時にオーケストラの楽器について子供達に教えることができるように、デジタルオーケストラで学生たちを教えています。詳細はポスターセッション、パネルディスカッションでまたお伝えしたい。

中地：プラッゲ先生にご覧頂いた各地の取り組みについて感想を頂きたい。
プラッゲ氏：台湾では電子楽器のみの編成でオーケストラを編成していた。これはヨーロッパでは珍しい。自分は何度か見たことがあるが、ドイツ語圏の人たちには驚きだろう。チェコの方では、非常に音楽的に演奏していると感じられた。弦楽器と電子キーボードを組み合わせて広がっている。経済的な理由や学習環境によってオケに参加できない先生や生徒がオケに参加できるようになっているのが素晴らしい。
　台湾ではグランドピアノ、チェコは電子ピアノを使っていたが、音楽的な感情や表現に向かう意志はどちらにも素晴らしい形で現れていた。どちらもコンサートではなく練習風景だが、どちらも良い演奏である。ドイツ語圏はいろんな意味で保守的だが、電子鍵盤楽器の可能性は、今後ドイツ語圏でも更に広がっていくと良い。

質問　柴田薫（昭和音大）：自分はヨーロッパの音楽を勉強するアジアの人間という立場である。アジアからヨーロッパに対して発信することは大きな冒険であり、受け入れて頂けると非常にありがたい。広めるためには演奏の機会や学会などが必要かと感じる。そういうことに対して、ドイツ語圏の先生がたはどう考えていらっしゃるのか。
プラッゲ氏：個人的な考え方だが、ドイツ、オーストリアはクラシック音楽に関しては保守的な側面がある。オケの伝統もあり、時間はかかる。ピアノ会社を見てもヤマハやカワイは電子技術を活用した楽器を開発しているが、スタインウェイはサイレントピアノに止まっている。聴衆や関係者にすぐ受け入れられるとは思わないので時間をかけて取り組む必要があるだろう。

報告　森松慶子

ロルフ・プラッゲ教授プロフィール

　ロルフ・プラッゲ教授は、1959 年生まれのドイツ出身のピアニストで､国際的な演奏活動を展開している。フライブルグ、ウィーン、ニューヨーク、ハノーファーの音楽大学でバドゥラ・スコダなどに師事。
その間に、チャイコフスキー、エリザベートなど主要な国際コンクールに上位入賞を果たしている。
　1991 年よりザルツブルグ･モーツァルテウム大学の教授に就任し、ザルツブルグのサマーアカデミーをはじめ、各地からマイスターコースの講師として招聘されている。また、ドイツ、オーストリア、フランス、ベルギー、ロシアなど各地での国際コンクールの審査員も務めている。